

# 方丈の足跡

その83

編集委員回し書き

「重度障害の女性 念願の自立生活」「事故の体験から命の大切さを訴える」「よきこいピックのボランティア委員長に」。1990年代半ばから、再々メディアに取り上げられている高知市の上田真弓さん(49)。自身でも自らの人生や社会参加について書いてきた。6月には3冊目の著作「生きる」(岡田玲一郎・社会医療研究所・東京都所長との共著、厚生科学研究所)を出版。4代に入っで見つけた「新しい道」の歩みを中心につづっている。

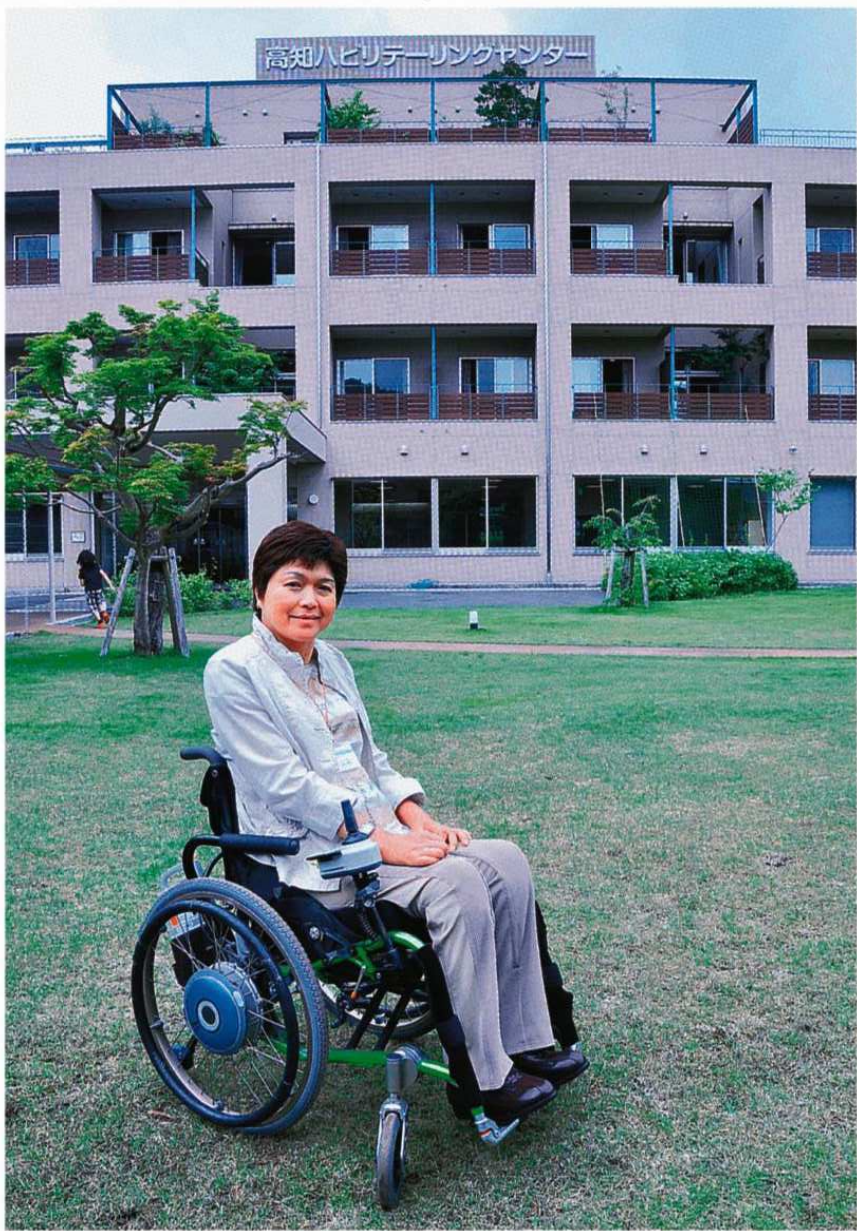
平日の午前8時15分、高知市北本町1丁目。幹線道路に面した15階建てのマンション前に、ラッシュユアワーカーの列を離れたワンボックスカーが止まった。バックドアが開き、スロープがスライドする。福祉タクシーだ。

1966年、高岡郡梶原町生まれ。中学からバレーボールに打ち込み、愛知県の大学時代には身長165センチながら「打てば決まる」アタッカーに成長。高知で体育教師になるといふ夢も膨らんでいた。

夢だった施設運営を始めて7年余り。センター長として張り切る上田真弓さん(高知市春野町内ノ谷)

## 車いす女性 3冊目の「自伝」

### 「念願の施設」運営記



ながらリハビリに励み、両腕を動かせるようになる。93年2月、帰高。高知市三里のケア付き住宅で暮らしながら、7月、同市北本町1丁目のリハビリ病院で医療ソーシャルワーカーの職を得る。通勤を容易にするため95年3月、勤務先から約300メートル離れたこの3LDKのマンションへ転居。ヘルパーらの支援を受けながら1人暮らしを始める。2007年6月に結婚。

午前8時45分。福祉タクシーは田園風景の広がる同市春野町内ノ谷へ。鉄筋コンクリート4階建ての本館を中心とした6棟の建物。畑も含め敷地面積約4万5000平方メートル。08年4月、県立身体障害者リハビリテーションセンターの運営が県から民間へ移管された。上田さんはその準備に奔走し、この新施設スタート時からセンター長を務めている。

「センターを運営するのが医療ソーシャルワーカーになってからの、20年ほど前からの夢でした。そうしたら、ここが県立から民間へ移管される話を聞いて。勤めていた病院の理事長に社会福祉法人を取ってもらって、移管先になれたんです」

移管前は主に身体障害者が対象で更生部門21人、授産部門35人。それが今は、手すり付き階段。押し入れやふとんのある6畳の和室。自宅などでの暮らしを再現した部屋では、利用者がトレーニングに励んでいる。更生部門を引き継いだ機能訓練や知的、精神障害者にも対応する生活訓練だ。授産部門として、パンなどを生産する就労継続支援B型もある。このほかグループホームや、特別支援学校に在学中の子どもたちへの居場所提供など、全10事業を10人以上が利用する一大センターとなった。

「私が事故に遭った1990年ごろの『自立』って、『何のケアも必要としない』『自分一人できると』という概念だったと思うんです。リハビリも、そういう『自立』生活を指すものだった。でも私は、できることはするが、できないことは人に頼っていい『自立』をイメージさせてくれるリハビリ、住居に巡り合えた。今や『(多様な)障害者を地域へ』という時代。そのためにも、私が巡り合えたような多様なトレーニング、住居を提供したかった」

「事業の中には、利用年数や入居年齢に制限を設けているものもあります。それは地域や社会へ羽ばたくため。小さな成功を積み重ね、自信を得て、次のステージへ挑戦する。それを全力で支援する『通過型』施設がこんなんです」

このほど出版された3冊目の著作「生きる」。施設運営を中心に、自らの歩みや「別れ」をつづっている



「この出会いには記していない。きつと、4冊目につづられるだろう。」